

機関番号：32416
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20730419
 研究課題名（和文） 教師の生徒との関係における悩みと教師の成長・発達およびその支援策
 についての研究
 研究課題名（英文） Teachers' Troubled Feelings About Their Relations With Their
 Students and Support for Their Growth/Development.
 研究代表者
 都丸 けい子 (TOMARU KEIKO)
 平成国際大学・法学部・講師
 研究者番号：40463822

研究成果の概要（和文）：

本研究では、生徒との人間関係における悩みを契機とした「教師の成長・発達モデル」（都丸、2007）について、23名の教師を対象に面接調査を行い、モデルの検証およびその有効性や教師支援への活用可能性について検討した。さらに、その過程で得られた知見を基に、特に初任期の教師と女性教師に着目し、モデルの精緻化および具体化を行った。その後、縦断的な面接調査の結果も踏まえ、生徒との関係に悩む教師への支援策を提示した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, we validated the “teachers’ growth and development model”, triggered by troubled feelings about their relations with their students. One-to-one semi-structured interview surveys were conducted with twenty-three teachers. In addition, examined the possible use of this model for teachers support. Then, novice and female teachers focus on, we refined the model. Based on results of a longitudinal interview, recommendations were made for measures to help them.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：カウンセリング、教師－生徒関係、教師のストレス・悩み、教師の成長・発達、教師支援

1. 研究開始当初の背景

(1) 悩みの有する二つの側面－メンタルヘルスの悪化要因と成長・発達への契機としての悩み経験－：教師のメンタルヘルスや疲労、バーンアウトが注目され、多くの研究がなされてきた。特に生徒との関係は悩みを抱く可能性が高く、また対生徒の悩みは生徒に与える影響に鑑みても看過できないと言える。しかし、そのような悩みを教師の成長・発達の

一要因として指摘する研究もある。したがって、悩みは短期的な視点においてはメンタルヘルスとの関連を、長期的視点においては成長・発達との関連を有していると考えられ、教師支援を考えた際、悩みとメンタルヘルスおよび成長・発達との関連を一連のプロセスで捉える視点が必要である。

(2) 教師の成長・発達を捉える新たな視点：

安藤（2000）は外的に付与された基準の達成により測られる右肩上がりの成長・発達ではなく、教師の内面化を前提とした変容の過程こそ教師の成長・発達であると指摘している。教師の内面で生じた認知の変容が当該教師の成長・発達感の生起と関連していることは実証的にも示されている（都丸、2005）。悩みを契機とした教師の変容に焦点を当て、悩む教師への支援策を構築する上で、教師の内面で生じた認知の変容に焦点を当てることは必要な視点である。悩みを契機とした成長・発達をより積極的に促すために、悩みを契機として個々の教師に生じた成長・発達のプロセスを教員集団で共有し生かしていく視点及び手段が求められている。

(3) 上記の学術的背景を踏まえ、申請者は、個別の教師の日々の教育実践の積み重ねから生じる成長・発達の共通性に焦点をあて、M-GTA（木下、1999）を用い、教師の成長・発達モデルの構築を試みてきた。具体的には、生徒との関係における悩みを契機とした成長・発達の過程を「悩みの発生の過程→悩みを抱えていく過程→悩みを契機とした変容とその過程」とし、それぞれの過程をモデル化した。しかし、構築されたモデルは抽象度が高く、生徒との関係に悩む教師の支援策として教育実践中で活用するためには、より具体化する必要があった。また、それぞれの過程のモデルは、性別・悩み経験時の教職経験年数等に一定の特徴を孕む可能性が示唆された。

2. 研究の目的

本研究では悩みとメンタルヘルス及び成長・発達の関連を一連の経過に着目し、より詳細な検討を加え、「教師の成長・発達モデル」を精査・改良、また新たに再構築することを目的とした。詳細な目的は、以下の3点である。

(1) 悩みの内容と変容の内容に関して：どのような悩み経験が、教師にどのような変容をもたらすのか？

(2) 悩みの一連の過程に関して：どのように悩む（以下、悩み方）のか？その悩み方を規定する要因は何か？また悩み方はメンタルヘルスやその悩みを契機とした成長・発達と関連しているのか？

(3)（上記2点の検証を通し）悩む過程での個人特性（性別や教職経験年数）に関して：特定の対象群で悩み方に特徴の有無を見出す事ができるのか？またその際どのような特徴を見出す事ができるのか？

3. 研究の方法

(1) 複数の教員（教職経験年が長期～短期、男性・女性）に対して、「教師の成長・発達モデル」を検証および精査・改良するため、教師を対象に生徒との関係における悩みに関して回想法による半構造化面接を実施する。特に、生徒との関係における悩みの中でも、その経験により自身が教師として成長・発達したと意味づけている経験に焦点を当てる。

(2) (1) のデータ検討と同時並行で、特定の対象群における悩み方の特徴の有無の同定を行う。その後、特徴を見出した対象群に対して、追加面接を行う。

(3) (1) および (2) において精査したモデルの検証を行うために、複数の教師を対象に面接調査を実施し、悩みを契機に成長・発達したと感じるプロセスを縦断的に検討する。その際、「教師の成長・発達モデル」を用いて悩みを抱える過程を確認し、モデルの概念が教師支援に与える影響について検討する。

4. 研究成果

(1) 「教師の成長・発達」モデルの検証：23名の教師（男性12名、女性11名）を対象に、生徒との人間関係における悩みとその経過および教職経験における意味づけについて回想法による半構造化面接調査を行った。その結果、語られた内容はいずれも「教師の成長・発達」モデルに沿って「悩みの発生の過程→悩みを抱えていく過程→悩みを契機とした変容とその過程」に構造化することが可能であった。しかし、語りの内容を「教師の成長・発達モデル」に沿って精査した際、共通して特徴的な語りを有する群とし、女性教師および初任期の教師が挙げられた。そこで、それらの群の特徴的な語りを抽出し検討することが新たな課題として提示された。

(2) 「教師の成長・発達」モデルを用いた教師支援策の検討：生徒との関係における悩みを抱えている過程にいた教師8名（男性6名、女性2名）に対して、「悩みを契機とした変容とその過程」の生起の試みとして、教師用RCRT（近藤、1994）を用いた。その理由は次の2点である。第1に、「教師の成長・発達モデル」の3段階目のプロセスである「悩みを契機とした変容とその過程」において、そのプロセスが生起する契機となるのは「悩みとの適度な距離」である。ここで、統計的な分析を基にした教師用RCRTが、悩みとの適度な距離を促す契機となると考えられた。第2に、「悩みを契機とした変容とその過程」においては、適度な距離が生じることで「悩み事象の振り返り」が促され、具体的な変容が

生じる。教師用 RCRT は教師自身の生徒への認知を客観的な視点から振り返ることを目的としているため、モデルのプロセスを促進するものと考えた。その結果、いずれの教師も自身特有の教師用 RCRT を基に生徒との悩みが生じた背景について考察が深まり、今後の対応策や自身の有する課題について言及するに至った。したがって、「教師の成長・発達」モデルを悩みを抱えた教師への支援策として用いる際、具体的な方法論として教師用 RCRT が活用可能であることが示唆された。しかし、過去の悩み経験を他者に語る意義について検討した都丸（2007）の研究結果を踏まえると、他者に悩み経験を語ることは聴き手との相互作用の中で語り手に振り返りを自ずと生じさせる。つまり、悩みを他者に語ることで自身が「悩みとの適度な距離」の生起を促すといえる。ここから、教師用 RCRT の使用それ自身が悩みを抱える教師に振り返りと変容をもたらすとは明確に同定できない。ただし、悩み経験を他者に語る際に、教師用 RCRT 用いることは生徒認知に焦点を当てた振り返りの生起を容易にさせる可能性があると考えられる。

上記の研究結果を踏まえ、今後の展望として以下の点が挙げられた。生徒との関係に悩みを抱える教師に対して、他者に悩みを語ることによる支援を学校の内外に組織的に構築し、悩みを語ることの意義をより積極的に捉える雰囲気を推進する事である。近年の教師集団に特徴的な事柄として指摘されている私事化や教員評価等を考慮した際、すでに存在している、悩む教師を対象とした相談機関や従来現場の知として同僚間で自然発生的になされてきていた悩みについての語りのみでは不十分であると考えられる。管理職が中心となり、日常の教育現場の中で気軽に悩みを相談することを促進し、悩むことが力不足やメンタルヘルスの悪化のみの枠組みで捉えられる事の無いような組織作りを行うことが求められる。具体的には、悩みと成長・発達についての適切な理解を、研修等を通じて各教員が共通理解を有することである。このことにより、悩む教師自身が悩みを語ることに對して抱く抵抗感を減じ、また教師間で悩みを聴くことへの積極的な態度が促されるものと考えられる。また、教師用 RCRT 使用の啓発や適切な活用も含め、各学校に配属されているスクールカウンセラーを教師の成長・発達を支援する存在として活用することも求められる。

(3)「教師の成長・発達」モデルの精査—特徴的な特性を有する対象群についての検討—：「教師の成長・発達」モデルの検証を行う過程で、女性教師および初任期の教師群に共通する特徴的な語りが得られたため、語り

の内容を詳細に分析し検討を行った。

①「教師の成長・発達モデル」から見た女性教師に特徴的な生徒との関係における悩みについて：女性教師9名を対象に半構造化面接より得られたデータの検討を行った結果、特徴的な側面として以下の5点が抽出された。まず、「悩みの発生の過程」において、その背景に生徒から見た女性教師に対する特有の2つの視点が影響していることが語られた。それは第1に、生徒の性差による相違（女子／男子生徒から見た女性教師・女性教師から見た女子／男子生徒の視点の相違）である。具体的には、女子生徒は話しかけやすく話しかけやすいという特徴が語られた一方、男子生徒に関しては、発達の程度で女性教師への関わりが異なる事、また関わりにくい生徒や叱りやすい生徒の存在が挙げられた。第2に、「母親的」役割（生徒にとって否定的／肯定的に捉えられる母親像の投影）である。具体的には、口うるさいまたは世話を焼き過ぎてします母親的役割と生徒から「うるさいな」と思われながらも場面場面で声かけを行う母親的役割であった。さらに、一般的に女性特有の性質として挙げられる以下の特徴もまた、女性教師自身から悩みの生起に関連しているものとして挙げられた。それは第3として「感情豊か／感情的」な側面および「細やかさ／細かさ」である。最後に、特に「悩みを抱えていく過程」において特徴的であった点として2点が挙げられた。それは第4となる「人間関係への過敏さ」である。具体的には、ネガティブな側面から捉えた場合は悩みの生起に繋がりやすいが、ポジティブな側面から捉えた場合は「悩みを抱えていく過程」において影響が大きいと考えられる「支え」となっていた。なお、悩みを抱えた際に支えとなる人間関係には、同僚のみならず生徒との関係も含まれ、味方になってくれること、助けてくれること、自分をわかってくれることが支えの内容として挙げられた。同様の結果を指摘した研究として、都丸（2005）は、量的な調査により生徒との人間関係に悩みを抱えた女性教師の対処方略として最も影響を与える要因を「情緒調整」であることを明らかにしている。本研究の結果からも同様のことが指摘されたと言える。このような事から、生徒との人間関係における悩みを抱えた際に、教員間に人間関係がないかまたは協力し合う雰囲気がない場合、孤立化により女性教師にとって悩みが一層苦しいものとなっていく様子が明らかとなった。また、第5として、教員集団の中での女性教師の立場に関する言及である。具体的には、生徒の性差に関わる役割期待が挙げられていた。それは実践を通して気づき、身につけられていくものである事が明らかとなり、そのような期

待に戸惑いまた模索していく過程で「悩みの発生の過程」が生じることが散見された。この際、学校または学年の教職員の構成に性別による人数の偏りがあり女性教師のロールモデルを得にくいかな否か、またロールモデルの獲得を支える存在がいるかな否かが「悩みを抱えていく過程」に影響を与えていた。しかし、この悩みを語った女性教師全員が、このような過程を経て「悩みを契機とした変容とその過程」において役割期待への気づきや獲得が生じていた。上記の結果を踏まえると、生徒との関係における悩みにおいて女性教師特有の側面を踏まえ、支援を行う必要があると考えられる。

②「教師の成長・発達モデル」から見た初任期の教師に特徴的な生徒との関係における悩みについて：初任期の教師 13 名（男性 6 名、女性 7 名）を対象に半構造化面接より得られたデータの検討を行った。始めに、入職後の悩みの内容の検討および悩みへの対処について検討した。その結果、初任期の教師たちが直面する悩みとして「教師職特有の文化への戸惑いと模索」および「教師という立場獲得への模索」が挙げられた。第 1 に「教師特有の文化への戸惑いと模索」に関しては、いわゆる「リアリティ・ショック」に相当するものであり、授業や事務作業、学校の流れ等が含まれている。第 2 に「教師という立場獲得への模索」には生徒との人間関係の形成や距離感等が含まれている。さらにそのような悩みへの対処過程で教師の支えとなったのは、「初任期という立場」、「周囲の教師（相談・協力）」、「生徒との年齢の近さ（距離の近さ）」、「無我夢中」、「時間による区切り（学期・年度）」の 5 点であった。ただし、初任期におけるこれらの支えは、それぞれ両価性を有していた。具体的には、「初任期という立場」および「周囲の教師（相談・協力）」には、自分の力のなさへの直面による自信喪失があり、同時に周囲に頼ってばかりの状態への気後れ、さらに期待した以上にそれらが支えとして得られない場合には落胆を経験していた。続いて、「生徒との年齢の近さ（距離の近さ）」に関しては、いわゆる教師生徒関係が曖昧になったり崩されることへの不安を抱えていた。さらに、「無我夢中」においては、悩みへの直面化を先延ばしにする働きを有している一方、それ自体が多忙感を生みだしストレスとなっている場合、またじっくり取り悩み事項に組めないことへの自責や後悔を生起している場合も見出された。なお、「時間による区切り（学期・年度）」は「無我夢中」でいられたことの背景にもなっており、次学期や次年度への時間的な展望を与えると同時に見通しのなさへの不安もまた喚起させていた。

なお、悩みへの対処過程で教師の支えとなったものが包含する両価性の部分は、結果的に「教師という立場確立への模索」に関する悩みへと再帰していた。「教師という立場確立への模索」では、1 年を経験した時点で 2 年目以降の課題として語る教師が多かったことから鑑みると、再帰性が継続の背景にあると考えられる。しかし、悩みを抱えることはそれ自体がストレス状態である。初任期の教師が悩みを抱えながらも初年度を過ごせた理由、さらにそこから次年度以降の課題を見出した理由は、本研究で指摘した 5 つの支えによるものが大きい。以上の結果を踏まえ、初任期の教師支援を行う際には、初任者にとって支えとなるものの有する両価性への葛藤を念頭におく必要があることが示唆された。その支えのもとで 1 年間を乗り切れたこと自体が自信となり、教職継続へ寄与するものと考えられる。

③「教師の成長・発達モデル」から見た初任期の教師に特徴的な生徒との関係における悩みの過程について：ここでは、「教師の成長・発達モデル」の過程に沿って検討した結果について述べる。第 1 に、「悩みの発生の過程」においては「理想像と責任感」に関して初任期に特徴的であった語りが得られた。つまり、初任期は「こうしたい、こうすべき、こうあって欲しい」との思いと現実の「わからなさ（時間的見通しのなさ、接し方関わり方の判断基準、予想外の出来事や展開）」との間に相違が生じ、結果として心の余裕を失いやすい状況に置かれてしまうのである。このような戸惑いの状況が「悩みの発生の過程」の背景となっていた。第 2 に、「悩みを抱えていく過程」においては、取り組みの原動力として「負けたくない、逃げたくない、責任がある」といった思いが挙げられた。「教師の成長・発達モデル」において、この思いを支えるものは「悩みに巻き込まれない」、「受け入れられ認められる」、「悩みを受け入れる」であるが、いずれも初任期特有のプロセスを見出す事ができた。第 3 に、「悩みを契機とした変容とその過程」に関しては、以下の 3 点が挙げられた。それは、配属先が「希望する校種かな否か?」、「生徒指導困難効果否か?（生徒の問題行動への対応の責任がどの程度あるか）」、「初任者を育てる/初任者が育ちやすい雰囲気や人間関係があるかな否か?」であった。これらは初任教師の戸惑いの程度や、悩みを抱えた際の心の安定への寄与に関連していた。これら支えが書けていた場合、身体症状を呈していた教師も見られた。上記のような初任期に共通する悩みの過程の特徴を踏まえ、初任期のテーマは教師としての自分の確立と自信の獲得であるといえる。初任に限らず教師は日々の教育実践の中

で思考錯誤と成功・失敗体験を繰り返している。この点に関し、初任の教師は周囲の教師から助言を得たり、周囲の教師の行動を観察することで他者の様子をまねることを試みる。しかし、必ずしもうまくいかないことを学ぶ。このように初任期の教師は、自分なりのスタイルややり方を模索し、確立を試みる中で、経験そのものが自信となっていくのである。したがって、教師としての自分を築く初任の時期に教師自身の課題となっていることは、余裕のなさや多忙感、疲労とどうつきあっていくかであると考えられる。

④「教師の成長・発達モデル」から見た初任期の教師に特徴的な生徒との関係における悩みの縦断的な事例検討：初任期の教師2名に対して継続的な半構造化面接調査を実施し、「教師の成長・発達モデル」に沿って事例検討を行った。具体的には、悩みの過程にいる教師が悩みを得、その悩みに取り組み、解決の経験を得るまたは悩みを抱えていく過程のそれぞれの地点で、継続的に分析を行った。その結果、初任期の教師が直面した悩みから今後の当該教師の中心的な課題を得ている様相を見出すことができ、課題から得られたものは新たに生じた別の悩みに対して対処の仕方案として有効に活用されていくことが明らかとなった。したがって、悩むことが実際に成長・発達として認識されていくことが実証されたと言える。このことから、初任期の教員に関わる採用や研修の在り方について以下の提言を行った。第1に、「教師職特有の文化への戸惑いと模索」および「教師という立場獲得への模索」への支援を行うことである。教師としてどう生きていくのかといったアイデンティティ形成への支援である。また、同僚や初任期特有の自己像からの支えのもと、1年間「乗り切ること」ができるための戦略の取得および確立である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①都丸けい子、齊藤俊則、大野精一、初任教師の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究(その2)、日本教育大学院大学研究紀要、査読有、3巻、2009、119-137

②齊藤俊則、都丸けい子、大野精一、初任教師の教師キャリア発達等に関する探索的な調査研究(その1)、日本教育大学院大学研究紀要、査読有、2巻、2008、135-144

[学会発表] (計4件)

①都丸けい子、初任期の教師の悩みと成長・

発達、日本教育心理学会第52回総会、2010年8月28日、早稲田大学

②都丸けい子、自主シンポジウム33：女性教師のストレス、研究と改善の課題—研究者から現職者への提案—女性教師の直面する生徒との人間関係における悩みの特徴、日本教育心理学会第52回総会、2010年8月28日、早稲田大学

③都丸けい子、初任期における中学校教師の悩みと対処過程、日本学校心理学会第12回大会、2010年7月31日、水戸市民会館

④都丸けい子・庄司一子、中学校教師の生徒認知の特徴と生徒との関係における悩みに対する教師支援への活用—生徒との関係における悩みを契機とした「教師の成長・発達モデル」を基に—、日本教育心理学会第50回総会、2008年10月11日、東京学芸大学

[図書] (計2件)

①庄司一子(監修)、五十嵐哲也、杉本希映(編集)、小林朋子、都丸けい子、中井大介、ナカニシヤ出版、事例から学ぶ児童・生徒の指導と援助、2009、21-30、129-136、143-155、171-184

②高橋誠(監修)、都丸けい子、他20名、教育評論社、先生のための新しい教育メソッド入門、2008、104-109

6. 研究組織

(1) 研究代表者

都丸 けい子 (TOMARU KEIKO)
平成国際大学・法学部・講師
研究者番号：40463822

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：